

【発表論題】

ヴァルター・ベンヤミンの芸術美学——「自然との関係」と「歴史との関係」の観点から

秋丸 知貴（無所属）

【発表要旨】

ヴァルター・ベンヤミンは「ボードレールにおける幾つかの主題について」（1939年）で、「芸術の価値として現れ」る「美は、自然との関係と歴史との関係という二通りで定義可能」と述べている。本発表は、従来殆ど全く注目されてこなかったこのベンヤミンの芸術美学を、彼の中心概念である「アウラ」との関係において考察する。

まず、原著を比較分析すれば、「アウラ」は同一の時空間上に存在する主体と客体の相互作用により相互に生じる変化、及び相互に宿るその時間的全蓄積と要約できる。また、持続的経験体として共にアウラを宿す主体と客体が同一の時空間上で相互作用し、さらにアウラを相互に更新し続ける関係を「アウラ的關係」、その場合の主体の客体に対する意識的知覚を「アウラ的知覚」と定義できる。

その上で、ベンヤミンは「複製技術時代の芸術作品」（1935年）で「美的仮象の意義は、今や終焉に近付いているアウラ的知覚の時代において基礎付けられた」とし、「セントラルパーク」（1939年）で「仮象の喪失とアウラの凋落は同一の現象」と説き、「ゲーテの『親和力』」（1921-22年）で「仮象は被いとして美に属し」、「被いも被われる対象も美ではなく、美は被いの内にある対象である」と定義している。これらのことから、仮象とアウラと被いは同義であり、一般に物がアウラを備えた状態を美と見做していることが分かる。

そして、ベンヤミンは「ボードレールにおける幾つかの主題について」で、芸術作品の「自然との関係における美は『被われてある状態でのみ本質的に自己自身と同一であり続ける』もの」と定義し、「この被いを芸術作品における『摸写』と呼んでも良い」と説明している。従って、制作者（主体）が自然物（客体）をアウラ的關係の中で摸写する時に、その摸写像に「心と目と手」（「物語作者」1936年）の連関を通じて表現される、アウラとしての主観的情動の変化の全蓄積が、まず芸術作品の自然との関係における美を構成すると分析できる。

さらに、ベンヤミンは「ボードレールにおける幾つかの主題について」で、芸術作品の「美は、その歴史的な存在態としては、以前にそれを賞賛した人々の元へ集まれという呼声である」とし、「この定義の場合には、美における仮象は、賞賛が惹かれる対象自体は当の作品の中には見出されないことを意味する。賞賛が享受するのは、前世代がその作品において賞賛したものである」と論じている。このことから、鑑賞者（主体）がアウラ的關係の中で賞賛する時にその芸術作品（客体）に備わる、アウラとしての「歴史的証言性」（「複製技術時代の芸術作品」）の変化の全蓄積が、次に芸術作品の歴史との関係における美を構成すると読解できる。

以上のことから、ベンヤミンの芸術美学として、制作美学としての「自然との関係における美」と鑑賞美学としての「歴史との関係における美」を指摘できる。

(1,200字)